

# 障害を理由とする差別の解消の推進に関する広島県教育関係職員対応要領

## もくてき (目的)

第1条 この要領は、障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律(平成25年法律第65号。以下「法」という。)第10条第1項の規定に基づき、また、障害を理由とする差別の解消の推進に関する基本方針(平成27年2月24日閣議決定)に即して、法第7条に規定する事項に関し、教育関係職員(広島県教育委員会組織規則に定める事務局、県立学校及び学校以外の教育機関に勤務する職員。以下「職員」という。)が適切に対応するために必要な事項を定めるものとする。

## ていぎ (定義)

第2条 この要領において「教育委員会」とは、広島県教育委員会組織規則に定める事務局、県立学校及び学校以外の教育機関をいう。

2 この要領において「障害者」とは、身体障害、知的障害、精神障害(発達障害を含む。)その他の心身の機能の障害(以下「障害」という。)がある者であつて、障害及び社会的障壁(障害がある者にとって日常生活又は社会生活を営む上で障壁となるような社会における事物、制度、慣行、概念その他一切のもの。以下同じ。)により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう。

## ふとう きべつてきとりあつか (不当な差別的取扱いの禁止)

第3条 職員は、法第7条第1項の規定のとおり、その事務又は事業を行うに当たり、障害を理由として、障害者でない者と不当な差別的取扱いをすることにより、障害者の権利利益を侵害してはならない。これに当たり、職員は、別紙に定める留意事項に留意するものとする。

なお、別紙中、「望ましい」と記載している内容は、それを実施しない場合であっても、直ちに法に反すると判断されるものではないが、障害者基本法(昭和45年法律第84号)の基本的な理念及び法の目的を踏まえ、できるだけ取り組むことが望まれることを意味する(次条において同じ。)

ごうりてきはいりよ ていきょう  
(合理的配慮の提供)

第4条 職員は、法第7条第2項の規定のとおり、その事務又は事業を行うに当たり、障害者から現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合において、その実施に伴う負担が過重でないときは、障害者の権利利益を侵害することとならないよう、当該障害者の性別、年齢及び障害の状態に応じて、社会的障壁の除去の実施について必要かつ合理的な配慮（以下「合理的配慮」という。）の提供をしなければならない。これに当たり、職員は、別紙に定める留意事項に留意するものとする。

かんりしや せきむ  
(管理者の責務)

第5条 管理者（教育委員会の管理職をいう。）は、前2条の趣旨を踏まえ、障害を理由とする差別の解消を推進するため、次に掲げる事項を実施しなければならない。

(1) 日常の執務を通じた指導等により、障害を理由とする差別の解消に関し、その管理している職員の注意を喚起し、障害を理由とする差別の解消に関する認識を深めさせること。

(2) 障害者等から不当な差別的取扱い、合理的配慮の不提供に対する相談、苦情の申し出等があった場合は、迅速に状況を確認すること。

(3) 合理的配慮の必要性が確認された場合、管理している職員に対して、合理的配慮の提供を適切に行うよう指導すること。

2 管理者は、障害を理由とする差別に関する問題が生じた場合には、迅速かつ適切に対処しなければならない。

そうだんたいせい せいび  
(相談体制の整備)

第6条 職員による障害を理由とする差別に関する障害者及びその家族その他の関係者からの相談等に的確に対応するため、相談窓口を教育委員会事務局管理部総務課、教職員課及び教育部特別支援教育課に置く。

2 相談等を受ける場合は、性別、年齢、障害の状態等に配慮するとともに、対面のほか、電話、ファックス、電子メールに加え、障害者が他人とコミュニケーションを図る際に障害の特性に応じて必要となる多様な手段を可能な範囲で用意して対応するものとする。

3 相談者の用意した意思疎通のための器具や手段については、原則として利用を認めると

ともに、相談者の意思疎通を補助し、又は支援する同伴者については、原則として同席を認めるものとする。

- 4 相談窓口<sup>そうだんまどぐち</sup>に寄せられた相談等<sup>よ</sup>は、相談者<sup>そうだんなど</sup>の意向<sup>そうだんしゃ</sup>やプライバシー<sup>いこう</sup>に配慮<sup>はいりょ</sup>しつつ、関係者等<sup>かんけいしゃなど</sup>において、情報共有<sup>じょうほうきょうゆう</sup>を図り<sup>はか</sup>、早期<sup>そうき</sup>の解決<sup>かいけつ</sup>に努めるものとする。
- 5 相談窓口<sup>そうだんまどぐち</sup>は、プライバシー<sup>はいりょ</sup>に配慮<sup>よ</sup>し、寄せられた相談等<sup>そうだんなど</sup>を以後<sup>いご</sup>の相談等<sup>そうだんなど</sup>において活用<sup>かつよう</sup>するとともに、相談体制<sup>そうだんたいせい</sup>の充実<sup>じゅうじつ</sup>に努めるものとする。

#### たいおう そち (対応措置)

第7条 相談窓口<sup>だい じょう そうだんまどぐち</sup>に寄せられた相談等<sup>よ</sup>について、事実関係<sup>そうだんなど</sup>の調査<sup>じじつかんけい</sup>及び確認<sup>ちょうさおよ</sup>の結果<sup>かくにん</sup>、職員<sup>けっか</sup>が被害者<sup>しよくいん</sup>に対して不当な差別的取扱い<sup>しょうがいしゃ</sup>をした<sup>たい</sup>、又は、過度な負担<sup>ふとう</sup>がないにもかかわらず<sup>さべつてきとりあつか</sup>合理的配慮<sup>また</sup>の提供<sup>かど</sup>を<sup>ふたん</sup>しなかったと確認<sup>また</sup>された場合は、事案<sup>かど</sup>の内容<sup>ふたん</sup>や程度<sup>また</sup>に応じ、懲戒処分<sup>ごうりてきはいりょ</sup>を含む人事管理上<sup>ていきょう</sup>の措置<sup>かくにん</sup>に付<sup>ばあい</sup>されることがある<sup>じあん</sup>。

#### けんしゅう けいはつ (研修・啓発)

- 第8条 教育委員会事務局<sup>だい じょう きょういくいんかいじむきょく</sup>管理<sup>かんりぶ</sup>部<sup>そ</sup>総務課<sup>むかまた</sup>又は教職員課<sup>きょうしよくいんか</sup>において、障害<sup>しょうがい</sup>を理由<sup>りゆう</sup>とする差別<sup>さべつ</sup>の解消<sup>かいしょう</sup>の推進<sup>すべ</sup>を図るため、全ての職員<sup>しよくいん</sup>を対象<sup>たいしょう</sup>とし、職位<sup>しよくい</sup>や業務<sup>ぎょうむ</sup>に応じて必要な研修<sup>お</sup>・啓発<sup>ひつよう</sup>を行うものとする。
- 2 特に、新たに職員<sup>とく</sup>となった者<sup>あら</sup>に対しては、障害<sup>しょうがい</sup>を理由<sup>りゆう</sup>とする差別<sup>さべつ</sup>の解消<sup>かいしょう</sup>に関する基本的な事項<sup>きほんてき</sup>について理解<sup>じこう</sup>させるために、また、新たに管理者<sup>あら</sup>となった職員<sup>かんりしゃ</sup>に対しては、障害<sup>しょうがい</sup>を理由<sup>りゆう</sup>とする差別<sup>さべつ</sup>の解消<sup>かいしょう</sup>等<sup>かん</sup>に関し求められる役割<sup>も</sup>について理解<sup>やくわり</sup>させるために、それぞれ、必要な研修<sup>ひつよう</sup>を実施<sup>けんしゅう</sup>するものとする。
- 3 職員<sup>しよくいん</sup>に対し、研修資料<sup>たい</sup>及び啓発資料<sup>けんしゅうしりょう</sup>により、障害<sup>けいはつ</sup>の特性<sup>しよくい</sup>や多様性<sup>とくせい</sup>を理解<sup>たようせい</sup>させ、障害者<sup>りかい</sup>に適切<sup>しょうがいしゃ</sup>に対応<sup>てきせつ</sup>するよう、意識<sup>たいおう</sup>の啓発<sup>いしき</sup>を図るものとする。

#### ふ そく 附 則

この要領<sup>ようりょう</sup>は、平成28年4月1日<sup>へいせい ねん がつ にち</sup>から施行<sup>しこう</sup>する。

障害を理由とする差別の解消の推進に関する広島県教育関係職員対応要領  
に係る留意事項

第1 不当な差別的取扱いの基本的な考え方

法は、障害者に対して、正当な理由なく、障害を理由として、財・サービスや各種機会の提供を拒否する又は提供に当たって場所・時間帯などを制限する、障害者でない者に対しては付さない条件を付けることなどにより、障害者の権利利益を侵害することを禁止している。

ただし、障害者の事実上の平等を促進し、又は達成するために必要な特別の措置は、不当な差別的取扱いではない。したがって、障害者を障害者でない者と比べて優遇する取扱い（いわゆる積極的改善措置）、法に規定された障害者に対する合理的配慮の提供による障害者でない者との異なる取扱いや、合理的配慮を提供等するために必要な範囲で、プライバシーに配慮しつつ障害者に障害の状況等を確認することは、不当な差別的取扱いには当たらない。

このように、不当な差別的取扱いとは、正当な理由なく、障害者を、問題となる事務又は事業について、本質的に関係する諸事情が同じ障害者でない者より不利に扱うことである点に留意する必要がある。

第2 正当な理由の判断の視点

正当な理由に相当するのは、障害者に対して、障害を理由として、財・サービスや各種機会の提供を拒否するなどの取扱いが客観的に見て正当な目的の下に行われたものであり、その目的に照らしてやむを得ないと言える場合である。教育委員会においては、正当な理由に相当するか否かについて、具体的な検討をせずに正当な理由を拡大解釈するなどして法の趣旨を損なうことなく、個別の事案ごとに、障害者、第三者の権利利益（例：安全の確保、財産の保全、損害発生防止等）及び教育委員会の事務又は事業の目的・内容・機能の維持等の観点に鑑み、具体的な場面や状況に応じて総合的・客観的に判断することが必要である。

職員は、正当な理由があると判断した場合には、障害者にその理由を説明するものとし、

理解を得るよう努めることが望ましい。なお、理解が得られない場合には、相談窓口への相談を考慮することが望ましい。

### 第3 不当な差別的取扱いの具体例

不当な差別的取扱いに当たり得る具体例は以下のとおりである。なお、第2で示したとおり、不当な差別的取扱いに相当するか否かについては、個別の事案ごとに判断されることとなる。また、以下に記載されている具体例については、正当な理由が存在しないことを前提としていること、さらに、それらはあくまでも例示であり、記載されている具体例だけに限られるものではないことに留意する必要がある。

- (1) 障害を理由に、窓口対応を拒否し、又は対応の順序を後回しにする。
- (2) 障害を理由に、書面の交付、資料の送付、パンフレットの提供、説明会やシンポジウムへの出席等を拒む。
- (3) 障害を理由に、施設等やそれらのサービスの利用をさせない。
- (4) 障害を理由に、県立学校への入学の出願の受理、受験、入学、授業等の受講や研究指導、実習等校外教育活動、入寮、式典参加を拒み、また、これらを拒まない代わりとして正当な理由のない条件を付す。
- (5) 試験等において合理的配慮の提供を受けたことを理由に、当該試験等の結果を学習評価の対象から除外し、評価において差をつける。
- (6) 事務・事業の遂行上、特に必要ではないにもかかわらず、障害を理由に、来庁の際に付き添い者の同行を求めるなどの条件を付けたり、特に支障がないにもかかわらず、付き添い者の同行を拒んだりする。
- (7) 身体障害者補助犬の同伴を拒否する。

### 第4 合理的配慮の基本的な考え方

1 障害者の権利に関する条約(以下「権利条約」という。)第2条において、「合理的配慮」は、「障害者が他の者との平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」と定義されている。

法は、権利条約における合理的配慮の定義を踏まえ、行政機関等に対し、その事務又は事業を行うに当たり、個々の場面において、障害者から現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合において、その実施に伴う負担が過重でないときは、障害者の権利利益を侵害することとならないよう、社会的障壁の除去の実施について、合理的配慮を行うことを求めている。合理的配慮は、障害者が受ける制限は、障害のみに起因するものではなく、社会における様々な障壁と相対することによって生ずるものとのいわゆる「社会モデル」の考え方を踏まえたものであり、障害者の権利利益を侵害することとならないよう、障害者が個々の場面において必要としている社会的障壁を除去するための必要かつ合理的な取組であり、その実施に伴う負担が過重でないものである。

合理的配慮は、教育委員会の事務又は事業の目的・内容・機能に照らし、必要とされる範囲で本来の業務に付随するものに限られること、障害者でない者との比較において同等の機会の提供を受けるためのものであること、事務又は事業の目的・内容・機能の本質的な変更には及ばないことに留意する必要がある。

- 2 合理的配慮は、障害の特性や社会的障壁の除去が求められる具体的な場面や状況に応じて異なり、多様かつ個別性の高いものであり、当該障害者が現に置かれている状況を踏まえ、社会的障壁の除去のための手段及び方法について、「第5 過重な負担の基本的な考え方」に掲げる要素を考慮し、代替措置の選択も含め、双方の建設的対話による相互理解を通じて、必要かつ合理的な範囲で、柔軟に対応がなされるものである。さらに、合理的配慮の内容は、技術の進展、社会情勢の変化等に応じて変わり得るものである。合理的配慮の提供に当たっては、障害者の性別、年齢、状態等に配慮するものとする。

なお、合理的配慮を必要とする障害者が多数見込まれる場合、障害者との関係性が長期にわたる場合等には、その都度の合理的配慮とは別に、後述する環境の整備を考慮に入れることにより、中・長期的なコストの削減・効率化につながる点は重要である。

- 3 意思の表明に当たっては、具体的な場面において、社会的障壁の除去に関する配慮を必要としている状況にあることを言語（手話を含む。）のほか、点字、拡大文字、要約筆記、筆談、口話、絵カード、コミュニケーションボード、実物の提示や身振りサイン等による合図、触覚による意思伝達など、障害者が他人とコミュニケーションを図る際に必要な手段（手話通訳等の通訳を介するものやICT機器によるものを含む。）により伝えられる。

また、障害者からの意思表示のみでなく、知的障害や精神障害（発達障害を含む。）等により本人の意思表示が困難な場合には、障害者の家族、支援者・介助者、法定代理人等、コミュニケーションを支援する者が本人を補佐して行う意思の表明も含む。

なお、意思の表明が困難な障害者が、家族、支援者・介助者、法定代理人等を伴っていない場合など、意思の表明がない場合であっても、当該障害者が社会的障壁の除去を必要としていることが明白である場合には、法の趣旨に鑑みれば、当該障害者に対して適切と思われる配慮を提案するために建設的対話を働きかけるなど、自主的な取組に努めることが望ましい。

- 合理的配慮は、障害者等の利用を想定して事前に行われる建築物のバリアフリー化、介助者や支援者等の人的支援、情報アクセシビリティの向上等の環境の整備を基礎として、個々の障害者に対して、その状況に応じて個別に実施される措置である。したがって、各場面における環境の整備の状況により、合理的配慮の内容は異なることとなる。また、障害の状態等が変化することもあるため、特に、障害者との関係性が長期にわたる場合等には、提供する合理的配慮について、適宜、見直しを行うことが重要である。
- 教育委員会がその事務又は事業の一環として実施する業務を事業者に委託等する場合は、提供される合理的配慮の内容に大きな差異が生ずることにより障害者が不利益を受けることのないよう、委託等の条件に、対応要領を踏まえた合理的配慮の提供について盛り込むよう努めることが望ましい。

## 第5 過重な負担の基本的な考え方

過重な負担については、具体的な検討をせずに過重な負担を拡大解釈するなどして法の趣旨を損なうことなく、個別の事案ごとに、以下の要素等を考慮し、具体的場面や状況に応じて総合的・客観的に判断することが必要である。職員は、過重な負担に当たると判断した場合は、障害者にその理由を説明するものとし、理解を得るよう努めることが望ましい。なお、理解が得られない場合には、相談窓口への相談を考慮することが望ましい。

- 事務又は事業への影響の程度（事務又は事業の目的、内容、機能を損なうか否か）
- 実現可能性の程度（物理的・技術的制約、人的・体制上の制約）
- 費用・負担の程度

## 第6 合理的配慮に関する留意点

幼児、児童及び生徒に対する合理的配慮の提供については、「文部科学省所管事業分野における障害を理由とする差別の解消の推進に関する対応指針」(平成27年文部科学省告示第180号)別紙2「学校教育分野」の2(1)において、主として以下の点に留意することが示されている。

ア 合理的配慮の合意形成に当たっては、権利条約第24条第1項にある、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするといった目的に合致するかどうかの観点から検討が行われることが重要である。

イ 合理的配慮は、一人一人の障害の状態や教育的ニーズ等に応じ、設置者・学校(学校教育法(昭和22年法律第26号)第1条に規定する学校(大学及び高等専門学校を除く。))をいう。以下同じ。)及び本人・保護者により、発達の段階を考慮しつつ合意形成を図った上で提供されることが望ましく、その内容を個別の教育支援計画に明記することが重要である。

ウ 合理的配慮の合意形成後も、幼児、児童及び生徒一人一人の発達の程度、適応の状況等を勘案しながら柔軟に見直しができることを共通理解とすることが重要である。

エ 合理的配慮は、障害者がその能力を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであるインクルーシブ教育システムの理念に照らし、その障害のある幼児、児童及び生徒が十分な教育が受けられるために提供できているかという観点から評価することが重要である。例えば、個別の教育支援計画や個別の指導計画について、各学校において計画に基づき実行した結果を評価して定期的に見直すなど、PDCAサイクルを確立させていくことが重要である。

オ 進学等の移行時においても途切れることのない一貫した支援を提供するため、個別の教育支援計画の引継ぎ、学校間や関係機関も含めた情報交換等により、合理的配慮の引継ぎを行うことが必要である。

## 第7 合理的配慮の具体例

第4で示したとおり、合理的配慮は、具体的場面や状況に応じて異なり、多様かつ個別性



の<sup>たか</sup>高いものであるが、<sup>ぐたいれい</sup>具体例としては、<sup>つぎ</sup>次のようなものがある。

なお、<sup>きさい</sup>記載した<sup>ぐたいれい</sup>具体例については、<sup>だい</sup>第5で<sup>しめ</sup>示した<sup>かじゅう</sup>過重な<sup>ふたん</sup>負担が<sup>そんざい</sup>存在しないことを<sup>ぜんてい</sup>前提としていること、また、これらはあくまでも<sup>れいじ</sup>例示であり、<sup>きさい</sup>記載されている<sup>ぐたいれい</sup>具体例だけに<sup>かぎ</sup>限られるものではないことに<sup>りゅうい</sup>留意する<sup>ひつよう</sup>必要がある。

## 1 <sup>ごうりてきはいりよ</sup>合理的<sup>あ</sup>配慮に<sup>え</sup>当たり<sup>ぶつりてきかんきよう</sup>得る<sup>はいりよ</sup>物理的<sup>ぐたいれい</sup>環境への<sup>ぐたいれい</sup>配慮の<sup>ぐたいれい</sup>具体例

- (1) <sup>さいがいじ</sup>災害時の<sup>けいほうおん</sup>警報音、<sup>きんきゆうれんらくなど</sup>緊急連絡等が<sup>き</sup>聞こえにくい<sup>しょうがいしゃ</sup>障害者に対し、<sup>たい</sup>職員が<sup>しよくいん</sup>直接<sup>ちよくせつさいがい</sup>災害を知らせたり、<sup>きんきゆうじょうほう</sup>緊急情報・<sup>かんないほうそう</sup>館内放送を<sup>しかくてき</sup>視覚的に<sup>じゆよう</sup>受容することができる<sup>けいほうせつび</sup>警報設備・<sup>でんこうひょう</sup>電光表示<sup>じききなど</sup>機器等を用意したり、<sup>ようい</sup>掲示板・<sup>けいじばん</sup>手書きの<sup>てが</sup>ボード等を用いて<sup>など</sup>分かりやすく<sup>もち</sup>案内したりする。
- (2) <sup>ちようかくかびん</sup>聴覚過敏の<sup>じどうせいとなど</sup>児童生徒等のために<sup>きょうしつ</sup>教室の<sup>つくえ</sup>机・<sup>いす</sup>椅子の<sup>あし</sup>脚に<sup>かんしょうざい</sup>緩衝材を<sup>つ</sup>付けて<sup>ぎつおん</sup>雑音を<sup>けいげん</sup>軽減する、<sup>しかくじょうほう</sup>視覚情報の<sup>しより</sup>処理が<sup>にがて</sup>苦手な<sup>じどうせいとなど</sup>児童生徒等のために<sup>こくばんまわ</sup>黒板周りの<sup>けいじぶつなど</sup>掲示物等の<sup>じょうほうりょう</sup>情報量を<sup>へ</sup>減らすなど、<sup>こべつ</sup>個別の<sup>じあん</sup>事案ごとに<sup>とくせい</sup>特性に<sup>おう</sup>応じて<sup>きょうしつかんきよう</sup>教室環境を<sup>へんこう</sup>変更する。
- (3) <sup>もくてき</sup>目的の<sup>ばしょ</sup>場所までの<sup>あんない</sup>案内の際に、<sup>しょうがいしゃ</sup>障害者の<sup>ほこうそくど</sup>歩行速度に<sup>あ</sup>合わせた<sup>そくど</sup>速度で<sup>ある</sup>歩いたり、<sup>かいじょ</sup>介助する<sup>いち</sup>位置（<sup>さゆう</sup>左右・<sup>ぜんご</sup>前後・<sup>きよりなど</sup>距離等）について、<sup>しょうがいしゃ</sup>障害者の<sup>きぼう</sup>希望を<sup>き</sup>聞いたりする。
- (4) <sup>ほごしゃ</sup>保護者、<sup>しえんいんなど</sup>支援員等の<sup>きょうしつ</sup>教室への<sup>にゆうしつ</sup>入室、<sup>じゆぎょう</sup>授業や<sup>しけん</sup>試験での<sup>にゆうりよくしえん</sup>パソコン入<sup>いどうしえん</sup>力支援、<sup>まちあいしつ</sup>待合室での<sup>たいき</sup>待機を<sup>きよか</sup>許可する。
- (5) <sup>だんさ</sup>段差がある<sup>ばあい</sup>場合に、<sup>くるまいすりようしゃ</sup>車椅子利用者<sup>あ</sup>に<sup>など</sup>キャスター<sup>ほじよ</sup>上げ等の<sup>けいたい</sup>補助をする、<sup>けいたい</sup>携帯スロープを<sup>わ</sup>渡すなどする。
- (6) <sup>はいかだな</sup>配架棚の<sup>たか</sup>高い<sup>ところ</sup>所に<sup>お</sup>置かれた<sup>など</sup>パンフレット等<sup>と</sup>を取って<sup>わた</sup>渡す。パンフレット等の<sup>など</sup>位置を<sup>わ</sup>分かりやすく<sup>つた</sup>伝える。
- (7) <sup>しょうがい</sup>障害の<sup>とくせい</sup>特性により、<sup>ひんぱん</sup>頻繁に<sup>りせき</sup>離席の<sup>ひつよう</sup>必要がある<sup>ばあい</sup>場合に、<sup>かいじょう</sup>会場の<sup>ざせき</sup>座席位置を<sup>いち</sup>扉<sup>とびらふきん</sup>付近にする。
- (8) <sup>ひろう</sup>疲労を感じやすい<sup>しょうがいしゃ</sup>障害者から<sup>べっしつ</sup>別室での<sup>きゆうけい</sup>休憩の<sup>もう</sup>申し出<sup>で</sup>があつた<sup>さい</sup>際、<sup>べっしつ</sup>別室の<sup>かくほ</sup>確保が<sup>こんなん</sup>困難であったことから、<sup>とうがいしょうがいしゃ</sup>当該障害者に<sup>じじょう</sup>事情を<sup>せつめい</sup>説明し、<sup>たいおうまどぐち</sup>対応窓口の<sup>ちか</sup>近くに<sup>ながいす</sup>長椅子を<sup>いどう</sup>移動させて<sup>りんじ</sup>臨時の<sup>きゆうけい</sup>休憩<sup>もう</sup>スペースを<sup>もう</sup>設ける。
- (9) <sup>ふずい</sup>不随意<sup>いりうどうなど</sup>運動等により<sup>しよるいなど</sup>書類等を<sup>お</sup>押さえることが<sup>むづか</sup>難しい<sup>しょうがいしゃ</sup>障害者に対し、<sup>たい</sup>職員が<sup>しよくいん</sup>書類を<sup>しよるい</sup>押さえたり、<sup>お</sup>バインダー<sup>など</sup>等の<sup>こていきぐ</sup>固定器具を<sup>ていきよう</sup>提供したりする。
- (10) <sup>しせつない</sup>施設内の<sup>てんじ</sup>点字<sup>じょう</sup>ブロック<sup>しょうがいぶつ</sup>上に<sup>お</sup>障害物を<sup>お</sup>置かない。

## 2 合理的配慮に当たり得る意思疎通の配慮の具体例

- (1) 点字、拡大文字、要約筆記、筆談、絵カード、コミュニケーションボード、読み上げ、手話等のコミュニケーション手段（ICT機器によるものを含む。）を用いる。特に、意思疎通が不得意な障害者に対しては、絵カード、コミュニケーションボード等を活用して意思を確認する。
- (2) 情報保障の観点から、見えにくさに応じた情報の提供（聞くことで内容が理解できる説明・資料や、拡大コピー、拡大文字又は点字を用いた資料、遠くのものや動きの速いものなど触ることができないものを確認できる模型や写真等の提供）、聞こえにくさに応じた視覚的な情報の提供、見えにくさと聞こえにくさの両方がある場合にに応じた情報の提供（手のひらに文字を書いて伝える等）、知的障害に配慮した情報の提供（伝える内容の要点を筆記する、漢字にルビを振る、単語や文節の区切り空白を挟んで記述する「分かち書き」にする、なじみのない外来語は避ける等）を行うこと。また、その際、各媒体間でページ番号等が異なり得ることに留意して使用する。
- (3) 知的障害のある利用者等に対し、抽象的な言葉ではなく、具体的な言葉を使うこと。例えば、サービスを受ける際の「手続」や「申請」など生活上必要な言葉等の意味を具体的に説明して、当該利用者等が理解しているかを確認する。
- (4) 子供である障害者又は知的障害、発達障害、言語障害等により言葉だけを聞いて理解することや意思疎通が困難な障害者に対し、絵や写真カード、コミュニケーションボード、タブレット端末等のICT機器の活用、視覚的に伝えるための情報の文字化、質問内容を「はい」又は「いいえ」で端的に答えられるようにすることなどにより意思を確認したり、本人の自己選択・自己決定を支援する。
- (5) 比喩表現等の理解が困難な障害者に対し、比喩や暗喩、二重否定表現などを用いずに説明する。
- (6) 会議資料等について、点字、拡大文字等で作成する際に、各々の媒体間でページ番号等が異なり得ることに留意して使用する。
- (7) 視覚障害のある出席者に会議資料等を事前送付する際、読み上げソフトに対応できるよう電子データ（テキスト形式）で提供する。

- (8) 駐<sup>ちゆうしゃじやう</sup>車<sup>か</sup>場<sup>じやう</sup>、会<sup>かい</sup>場<sup>じやう</sup>入<sup>い</sup>口<sup>ぐち</sup>など<sup>つうじやう</sup>で通<sup>こう</sup>常<sup>とう</sup>、口<sup>おこな</sup>頭<sup>あんない</sup>で<sup>かみ</sup>行<sup>わた</sup>う<sup>わた</sup>案<sup>わた</sup>内<sup>わた</sup>を、紙<sup>かみ</sup>に<sup>わた</sup>メ<sup>わた</sup>モ<sup>わた</sup>を<sup>わた</sup>し<sup>わた</sup>て<sup>わた</sup>渡<sup>わた</sup>す。
- (9) 書<sup>しよるいきにゆう</sup>類<sup>いらい</sup>記<sup>き</sup>入<sup>きゆうほう</sup>の<sup>いらい</sup>依<sup>きん</sup>頼<sup>にん</sup>時<sup>め</sup>に、記<sup>ま</sup>入<sup>え</sup>方<sup>しめ</sup>法<sup>わ</sup>等<sup>わ</sup>を<sup>わ</sup>本<sup>わ</sup>人<sup>わ</sup>の<sup>わ</sup>目<sup>わ</sup>の<sup>わ</sup>前<sup>わ</sup>で<sup>わ</sup>示<sup>わ</sup>し<sup>わ</sup>た<sup>わ</sup>り、分<sup>わ</sup>か<sup>わ</sup>り<sup>わ</sup>や<sup>わ</sup>す<sup>わ</sup>い<sup>わ</sup>記<sup>わ</sup>述<sup>わ</sup>で<sup>わ</sup>伝<sup>わ</sup>達<sup>わ</sup>し<sup>わ</sup>た<sup>わ</sup>り<sup>わ</sup>す。本<sup>わ</sup>人<sup>わ</sup>の<sup>わ</sup>依<sup>わ</sup>頼<sup>わ</sup>が<sup>わ</sup>あ<sup>わ</sup>る<sup>わ</sup>場<sup>わ</sup>合<sup>わ</sup>に<sup>わ</sup>は、代<sup>わ</sup>読<sup>わ</sup>や<sup>わ</sup>代<sup>わ</sup>筆<sup>わ</sup>と<sup>わ</sup>い<sup>わ</sup>つた<sup>わ</sup>配<sup>わ</sup>慮<sup>わ</sup>を<sup>わ</sup>行<sup>わ</sup>う。
- (10) 障<sup>しやうがい</sup>害<sup>しや</sup>者<sup>しや</sup>か<sup>しや</sup>ら<sup>しや</sup>申<sup>しや</sup>し<sup>しや</sup>出<sup>しや</sup>が<sup>しや</sup>あ<sup>しや</sup>つ<sup>しや</sup>た<sup>しや</sup>際<sup>しや</sup>に、ゆ<sup>しや</sup>っ<sup>しや</sup>く<sup>しや</sup>り、丁<sup>てい</sup>寧<sup>ねい</sup>に、繰<sup>く</sup>り<sup>かえ</sup>返<sup>せつ</sup>し<sup>めい</sup>説<sup>ない</sup>明<sup>り</sup>し、内<sup>り</sup>容<sup>かい</sup>が<sup>せつ</sup>理<sup>めい</sup>解<sup>ない</sup>さ<sup>り</sup>れ<sup>かい</sup>た<sup>り</sup>こ<sup>り</sup>と<sup>り</sup>を<sup>り</sup>確<sup>り</sup>認<sup>り</sup>し<sup>り</sup>な<sup>り</sup>が<sup>り</sup>ら<sup>り</sup>応<sup>り</sup>対<sup>り</sup>す。ま<sup>り</sup>た、な<sup>り</sup>じ<sup>り</sup>み<sup>り</sup>の<sup>り</sup>な<sup>り</sup>い<sup>り</sup>外<sup>り</sup>来<sup>り</sup>語<sup>り</sup>は<sup>り</sup>避<sup>り</sup>け<sup>り</sup>る、漢<sup>り</sup>数<sup>り</sup>字<sup>り</sup>は<sup>り</sup>用<sup>り</sup>い<sup>り</sup>な<sup>り</sup>い、時<sup>り</sup>刻<sup>り</sup>は<sup>り</sup>24<sup>り</sup>時<sup>り</sup>間<sup>り</sup>表<sup>り</sup>記<sup>り</sup>で<sup>り</sup>は<sup>り</sup>な<sup>り</sup>く<sup>り</sup>午<sup>り</sup>前<sup>り</sup>・午<sup>り</sup>後<sup>り</sup>で<sup>り</sup>表<sup>り</sup>記<sup>り</sup>す<sup>り</sup>る<sup>り</sup>な<sup>り</sup>ど<sup>り</sup>の<sup>り</sup>配<sup>り</sup>慮<sup>り</sup>を<sup>り</sup>念<sup>り</sup>頭<sup>り</sup>に<sup>り</sup>置<sup>り</sup>い<sup>り</sup>た<sup>り</sup>メ<sup>り</sup>モ<sup>り</sup>を、必<sup>り</sup>要<sup>り</sup>に<sup>り</sup>応<sup>り</sup>じ<sup>り</sup>て<sup>り</sup>適<sup>り</sup>時<sup>り</sup>に<sup>り</sup>渡<sup>り</sup>す。
- (11) 会<sup>かい</sup>議<sup>ぎ</sup>の<sup>しんこう</sup>進<sup>あ</sup>行<sup>しりよう</sup>に<sup>み</sup>当<sup>せつめい</sup>た<sup>き</sup>り、資<sup>しんこう</sup>料<sup>あ</sup>を<sup>しりよう</sup>見<sup>み</sup>な<sup>み</sup>が<sup>み</sup>ら<sup>み</sup>な<sup>み</sup>が<sup>み</sup>ら<sup>み</sup>説<sup>せつめい</sup>明<sup>き</sup>を<sup>き</sup>聞<sup>き</sup>く<sup>き</sup>こ<sup>き</sup>が<sup>き</sup>困<sup>こん</sup>難<sup>なん</sup>な<sup>し</sup>視<sup>しかく</sup>覚<sup>また</sup>又<sup>ちやう</sup>は<sup>かく</sup>聴<sup>しやう</sup>覚<sup>がい</sup>に<sup>しやう</sup>障<sup>がい</sup>害<sup>しや</sup>の<sup>しゅつせきしや</sup>あ<sup>ちてきしやうがい</sup>る<sup>しゅつせきしや</sup>出<sup>たい</sup>席<sup>たい</sup>者<sup>たい</sup>や<sup>たい</sup>知<sup>だれ</sup>的<sup>ほな</sup>障<sup>わ</sup>害<sup>わ</sup>の<sup>わ</sup>あ<sup>わ</sup>る<sup>わ</sup>出<sup>わ</sup>席<sup>わ</sup>者<sup>わ</sup>に<sup>わ</sup>対<sup>わ</sup>し、ゆ<sup>わ</sup>っ<sup>わ</sup>く<sup>わ</sup>り、誰<sup>わ</sup>が<sup>わ</sup>話<sup>わ</sup>して<sup>わ</sup>い<sup>わ</sup>る<sup>わ</sup>の<sup>わ</sup>か<sup>わ</sup>分<sup>わ</sup>か<sup>わ</sup>る<sup>わ</sup>よ<sup>わ</sup>う<sup>わ</sup>に<sup>わ</sup>挙<sup>き</sup>手<sup>しゅ</sup>して<sup>しゅ</sup>話<sup>しゅ</sup>す、一<sup>しゅ</sup>人<sup>しゅ</sup>ず<sup>しゅ</sup>つ<sup>しゅ</sup>話<sup>しゅ</sup>す<sup>しゅ</sup>な<sup>しゅ</sup>ど<sup>しゅ</sup>丁<sup>しゅ</sup>寧<sup>しゅ</sup>な<sup>しゅ</sup>進<sup>しゅ</sup>行<sup>しゅ</sup>を<sup>しゅ</sup>心<sup>しゅ</sup>が<sup>しゅ</sup>け<sup>しゅ</sup>る<sup>しゅ</sup>な<sup>しゅ</sup>ど<sup>しゅ</sup>の<sup>しゅ</sup>配<sup>しゅ</sup>慮<sup>しゅ</sup>を<sup>しゅ</sup>行<sup>しゅ</sup>う。
- (12) 会<sup>かい</sup>議<sup>ぎ</sup>の<sup>しんこう</sup>進<sup>あ</sup>行<sup>しりよう</sup>に<sup>み</sup>当<sup>せつめい</sup>た<sup>き</sup>り、出<sup>しんこう</sup>席<sup>あ</sup>者<sup>しゅつせきしや</sup>の<sup>しやうがい</sup>障<sup>しゅつせきしや</sup>害<sup>しやうがい</sup>の<sup>しゅつせきしや</sup>特<sup>しゅつせきしや</sup>性<sup>しゅつせきしや</sup>に<sup>しゅつせきしや</sup>合<sup>しゅつせきしや</sup>つ<sup>しゅつせきしや</sup>た<sup>しゅつせきしや</sup>サ<sup>しゅつせきしや</sup>ポ<sup>しゅつせきしや</sup>ー<sup>しゅつせきしや</sup>ト<sup>しゅつせきしや</sup>を<sup>しゅつせきしや</sup>行<sup>しゅつせきしや</sup>う、ま<sup>しゅつせきしや</sup>た<sup>しゅつせきしや</sup>介<sup>かい</sup>助<sup>じ</sup>者<sup>じ</sup>や<sup>じ</sup>支<sup>し</sup>援<sup>えん</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>しや</sup>同<sup>どう</sup>席<sup>せき</sup>を<sup>みと</sup>認<sup>め</sup>る<sup>な</sup>ど<sup>の</sup>可<sup>か</sup>能<sup>のう</sup>な<sup>はん</sup>範<sup>い</sup>圍<sup>は</sup>で<sup>の</sup>配<sup>はい</sup>慮<sup>りょ</sup>を<sup>おこな</sup>行<sup>う</sup>う。

### 3 ルール・慣行の柔軟な変更の具体例

- (1) 事<sup>じ</sup>務<sup>む</sup>手<sup>て</sup>続<sup>つづ</sup>き<sup>き</sup>の<sup>さい</sup>際<sup>さい</sup>に、職<sup>しよく</sup>員<sup>いん</sup>や<sup>きやう</sup>教<sup>いん</sup>員<sup>いん</sup>が<sup>ひつ</sup>必<sup>ひつ</sup>要<sup>ひつ</sup>書<sup>おこな</sup>類<sup>おこな</sup>の<sup>おこな</sup>代<sup>おこな</sup>筆<sup>おこな</sup>を<sup>おこな</sup>行<sup>おこな</sup>う。
- (2) 障<sup>しやうがい</sup>害<sup>しや</sup>者<sup>しや</sup>が<sup>しや</sup>立<sup>た</sup>つ<sup>れつ</sup>て<sup>なら</sup>列<sup>じゆん</sup>に<sup>ばん</sup>並<sup>ま</sup>ん<sup>ま</sup>で<sup>ま</sup>順<sup>ばあい</sup>番<sup>しゅ</sup>を<sup>うい</sup>待<sup>り</sup>っ<sup>り</sup>て<sup>り</sup>い<sup>り</sup>る<sup>え</sup>場<sup>とう</sup>合<sup>がい</sup>に、周<sup>しゅ</sup>圍<sup>うい</sup>の<sup>り</sup>理<sup>え</sup>解<sup>とう</sup>を<sup>とう</sup>得<sup>とう</sup>た<sup>とう</sup>上<sup>とう</sup>で、当<sup>とう</sup>該<sup>とう</sup>障<sup>しゅつせきしや</sup>害<sup>しゅつせきしや</sup>者<sup>しゅつせきしや</sup>の<sup>しゅつせきしや</sup>順<sup>しゅつせきしや</sup>番<sup>しゅつせきしや</sup>が<sup>しゅつせきしや</sup>来<sup>しゅつせきしや</sup>る<sup>しゅつせきしや</sup>ま<sup>しゅつせきしや</sup>で<sup>しゅつせきしや</sup>別<sup>べつ</sup>室<sup>しつ</sup>や<sup>い</sup>椅<sup>い</sup>子<sup>す</sup>を<sup>しゅつせきしや</sup>用<sup>しゅつせきしや</sup>意<sup>しゅつせきしや</sup>す。
- (3) 他<sup>た</sup>人<sup>にん</sup>と<sup>せつ</sup>の<sup>しよく</sup>接<sup>た</sup>触<sup>にん</sup>、多<sup>た</sup>人<sup>にん</sup>数<sup>ず</sup>の<sup>なか</sup>中<sup>なか</sup>に<sup>なか</sup>い<sup>なか</sup>る<sup>なか</sup>こ<sup>なか</sup>と<sup>なか</sup>よ<sup>なか</sup>る<sup>なか</sup>緊<sup>きん</sup>張<sup>ちやう</sup>の<sup>ふ</sup>た<sup>ふ</sup>め<sup>ふ</sup>、不<sup>ふ</sup>随<sup>はつ</sup>意<sup>せい</sup>の<sup>など</sup>発<sup>はつ</sup>声<sup>せい</sup>等<sup>など</sup>が<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>場<sup>あ</sup>合<sup>あ</sup>、緊<sup>きん</sup>張<sup>ちやう</sup>を<sup>かん</sup>緩<sup>わ</sup>和<sup>わ</sup>す<sup>る</sup>た<sup>め</sup>、当<sup>とう</sup>該<sup>とう</sup>障<sup>しゅつせきしや</sup>害<sup>しゅつせきしや</sup>者<sup>しゅつせきしや</sup>に<sup>せつ</sup>説<sup>せつ</sup>明<sup>めい</sup>の<sup>うえ</sup>上<sup>うえ</sup>、施<sup>し</sup>設<sup>せつ</sup>の<sup>じやう</sup>状<sup>きやう</sup>況<sup>きやう</sup>に<sup>お</sup>う<sup>う</sup>じ<sup>う</sup>て<sup>う</sup>別<sup>べつ</sup>室<sup>しつ</sup>を<sup>よう</sup>用<sup>よう</sup>意<sup>い</sup>す。
- (4) 移<sup>い</sup>動<sup>どう</sup>に<sup>こん</sup>困<sup>なん</sup>難<sup>なん</sup>の<sup>しやう</sup>あ<sup>しやう</sup>る<sup>しやう</sup>障<sup>しやう</sup>害<sup>しや</sup>者<sup>しや</sup>を<sup>はや</sup>早<sup>に</sup>め<sup>に</sup>入<sup>い</sup>場<sup>じやう</sup>さ<sup>い</sup>せ<sup>す</sup>椅<sup>い</sup>子<sup>す</sup>に<sup>ゆう</sup>誘<sup>ゆう</sup>導<sup>どう</sup>し<sup>ゆう</sup>た<sup>ゆう</sup>り、車<sup>くる</sup>椅<sup>まい</sup>子<sup>す</sup>を<sup>しやう</sup>使<sup>しやう</sup>用<sup>しやう</sup>す<sup>る</sup>障<sup>しやう</sup>害<sup>しや</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>き</sup>希<sup>き</sup>望<sup>ぼう</sup>に<sup>お</sup>う<sup>う</sup>じ<sup>う</sup>て、決<sup>き</sup>め<sup>ら</sup>れ<sup>た</sup>車<sup>くる</sup>椅<sup>まい</sup>子<sup>す</sup>用<sup>い</sup>以<sup>き</sup>外<sup>き</sup>の<sup>しやう</sup>客<sup>きやく</sup>席<sup>せき</sup>も<sup>しやう</sup>使<sup>しやう</sup>用<sup>しやう</sup>で<sup>き</sup>る<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>し</sup>す。
- (5) 入<sup>にゆう</sup>学<sup>がく</sup>試<sup>し</sup>験<sup>けん</sup>や<sup>けん</sup>検<sup>けん</sup>定<sup>てい</sup>試<sup>し</sup>験<sup>けん</sup>に<sup>お</sup>い<sup>て</sup>て、本<sup>ほん</sup>人<sup>にん</sup>・保<sup>ほ</sup>護<sup>ご</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>き</sup>希<sup>き</sup>望<sup>ぼう</sup>、障<sup>しやう</sup>害<sup>がい</sup>の<sup>じやう</sup>状<sup>きやう</sup>況<sup>きやう</sup>等<sup>など</sup>を<sup>ふ</sup>踏<sup>ふ</sup>ま<sup>え</sup>、別<sup>べつ</sup>室<sup>しつ</sup>で<sup>の</sup>受<sup>じゆ</sup>験<sup>けん</sup>、試<sup>し</sup>験<sup>けん</sup>時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>の<sup>えん</sup>延<sup>てん</sup>長<sup>じやう</sup>、点<sup>てん</sup>字<sup>じ</sup>や<sup>かく</sup>拡<sup>かく</sup>大<sup>だい</sup>文<sup>もん</sup>字<sup>じ</sup>、音<sup>おん</sup>声<sup>せい</sup>読<sup>よ</sup>み<sup>あ</sup>上<sup>き</sup>げ<sup>のう</sup>機<sup>しやう</sup>能<sup>なう</sup>の<sup>き</sup>使<sup>しやう</sup>用<sup>なう</sup>等<sup>き</sup>を<sup>き</sup>許<sup>き</sup>可<sup>よ</sup>す。
- (6) 点<sup>てん</sup>字<sup>じ</sup>や<sup>かく</sup>拡<sup>かく</sup>大<sup>だい</sup>文<sup>もん</sup>字<sup>じ</sup>、音<sup>おん</sup>声<sup>せい</sup>読<sup>よ</sup>み<sup>あ</sup>上<sup>き</sup>げ<sup>のう</sup>機<sup>しやう</sup>能<sup>なう</sup>を<sup>がく</sup>使<sup>しやう</sup>用<sup>なう</sup>して<sup>じやう</sup>学<sup>がく</sup>習<sup>しゅう</sup>す<sup>る</sup>児<sup>じ</sup>童<sup>どう</sup>生<sup>せい</sup>徒<sup>と</sup>等<sup>なう</sup>の<sup>た</sup>め<sup>に</sup>、授<sup>じゆ</sup>業<sup>ぎやう</sup>で<sup>使</sup>用<sup>しやう</sup>す<sup>る</sup>教<sup>きやう</sup>科<sup>か</sup>書<sup>しよ</sup>や<sup>しり</sup>資<sup>しり</sup>料<sup>りやう</sup>、問<sup>もん</sup>題<sup>だい</sup>文<sup>ぶん</sup>を<sup>てん</sup>点<sup>てん</sup>訳<sup>やく</sup>又<sup>かく</sup>は<sup>かく</sup>拡<sup>かく</sup>大<sup>だい</sup>し<sup>た</sup>もの<sup>や</sup>テ<sup>て</sup>キ<sup>き</sup>ス<sup>ト</sup>デ<sup>ー</sup>タ<sup>を</sup>事<sup>じ</sup>前<sup>ぜん</sup>に<sup>わた</sup>渡<sup>す</sup>す。
- (7) 聞<sup>き</sup>こ<sup>え</sup>に<sup>く</sup>さ<sup>の</sup>あ<sup>る</sup>児<sup>じ</sup>童<sup>どう</sup>生<sup>せい</sup>徒<sup>と</sup>等<sup>なう</sup>に<sup>たい</sup>対<sup>が</sup>し、外<sup>がい</sup>国<sup>こく</sup>語<sup>ご</sup>の<sup>さい</sup>ヒ<sup>ア</sup>リ<sup>ン</sup>グ<sup>の</sup>際<sup>さい</sup>に、音<sup>おん</sup>質<sup>しつ</sup>・音<sup>おん</sup>量<sup>りやう</sup>を<sup>ちやう</sup>調<sup>せ</sup>整<sup>せい</sup>し<sup>たり</sup>、文<sup>もん</sup>字<sup>じ</sup>に<sup>よ</sup>る<sup>だ</sup>代<sup>だ</sup>替<sup>たい</sup>問<sup>もん</sup>題<sup>だい</sup>を<sup>よう</sup>用<sup>い</sup>意<sup>す</sup>す。

- (8) 知的発達の遅れにより学習内容の習得が困難な児童生徒等に対し、理解の程度に応じて、視覚的に分かりやすい教材を用意する。
- (9) 肢体不自由のある児童生徒等に対し、体育の授業の際に、上・下肢の機能に応じてボール運動におけるボールの大きさや投げる距離を変えたり、走運動における走る距離を短くしたり、スポーツ用車椅子の使用を許可する。
- (10) 日常的に医療的ケアを要する児童生徒等に対し、本人が対応可能な場合もあることなどを含め、配慮を要する程度には個人差があることに留意して、医療機関や本人が日常的に支援を受けている介助者や支援者等と連携を図り、個々の状態や必要な支援を丁寧に確認し、過剰に活動の制限等をしないようにする。
- (11) 慢性的な病気等のために他の児童生徒等と同じように運動ができない児童生徒等に対し、運動量を軽減したり、代替できる運動を用意したりするなど、病気等の特性を理解し、過度に予防又は排除をすることなく、参加するための工夫をする。
- (12) 治療等のため学習できない期間が生じる児童生徒等に対し、補講を行うなど、学習機会を確保する方法を工夫する。
- (13) 読み・書き等に困難のある児童生徒等のために、授業や試験でのタブレット端末等のICT機器使用を許可したり、筆記に代えて口頭試問による学習評価を行ったりする。
- (14) 発達障害等のため、人前での発表が困難な児童生徒等に対し、代替措置としてレポートを課したり、発表を録画したもので学習評価を行う。
- (15) 学校生活全般において、適切な対人関係の形成に困難がある児童生徒等のために、能動的な学習活動などにおいてグループを編成する時には、事前に伝えたり、場合によっては本人の意向を確認したりすること。また、こだわりのある児童生徒等のために、話し合いや発表などの場面において、意思を伝えることに時間を要する場合は、話を考慮して、時間を十分に確保したり、個別に対応する。
- (16) 順番を待つことが苦手な障害者に対し、周囲の者の理解を得た上で、手続き順を入れ替える。
- (17) 会議、研修、講演などでは、スクリーン、手話通訳者、要約筆記、板書が良く見える場所等障害者が希望する場所に障害者自身の席と支援者の活動場所を確保し、支援者の周りを明るくするなどの配慮を行う。また、手話通訳は話し手の横で通訳するようにするとともに手話通訳が見えるように通訳台を準備する。

- (18) 車 両 乗 降 場 所 を 施 設 出 入 口 に 近 い 場 所 へ 変 更 す る。
- (19) 非 公 表 又 は 未 公 表 情 報 を 扱 う 会 議 等 に お い て ， 情 報 管 理 に 係 る 担 保 が 得 ら れ る 事 実 を 前 提 に ， 障 害 の あ る 委 員 の 理 解 を 援 助 す る 者 及 び コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン を 支 援 す る 者 ( 手 話 通 訳 者 等 ) の 同 席 を 認 め る 。
- (20) 電 話 に よ る 申 し 込 み や 本 人 確 認 に お い て ， 電 話 が で き な い 聴 覚 障 害 者 の た め に ， フ ァ ッ ク ス や メ ー ル な ど の 方 法 も 認 め る 。